

フィールドとのかかわり方を考える

—都市近郊における農地保全を事例として—

光武昌作

1. 本稿の目的

地域研究における地域社会と研究者のかかわりについて、研究事例をもとに考える。研究者は地域社会にどうかかわっていけばよいのか、そのためのヒントを探る。

他報告の中での位置づけを述べると、本稿の性格としては研究対象地としての「地域」が前提として存在しているといえる。その上で地域づくりやまちづくり、地域貢献などといった観点からその「地域」を研究する研究者の立場から、その役割や姿勢について考えようとするものである。

2. 地域と研究者のかかわり（研究者の対象へのかかわり方）

研究者がフィールドワークを行い、研究対象地域にかかわっていく中では、例えば、地域の人々との信頼関係をうまく築けるかや、フィールドとの距離、研究者としてのどのような立場にたったらよいのか、などについて考え、試行錯誤を重ねながら研究を進めていく。（『地域調査ことはじめ—あるく・みる・かく—』2007 ナカニシヤ出版より）

このように研究者がフィールドとかかわる際には、「研究者のポジション（どういう立場でかわるか）」といったことなどが問題となり、その上で「対象地域の課題や人々に研究者がどうこたえるのか」という課題も出てくるであろう。

以下では実際に筆者がかかわっている事例をもとにして、研究者と地域とのかかわりについて考えていきたい。

3. 実際に自分が地域にかかわってみる中で

(1) 筆者の研究及び対象地域について

筆者は、「食と農をむすぶ試みの展開可能性」をテーマに研究を行っている。事例の一つとして、食と農のあり方を問い直す試みとして有機農業を取り上げ、地方における有機農業の展開可能性について論文を執筆中である。そしてもう一つの事例として、遊休農地が増える中で、農家だけでなく近隣の住民も農地の担い手として連携して農地の保全・活用を行い、そこを食と農を結ぶ場として考えられないだろうかという視点で、対象地域にかかわっている。農地所有者・近隣住民・それらをつなぐ組織の連携可能性を検討しながら、実践上の課題を明確にしていくことを重視している。

対象地域は、広島県東広島市のほぼ中央に位置する I 地区である。I 地区は広島市の通勤圏内にあり、農業景観と住宅団地など新旧入り交じった環境にある。I 地区の総農地面積は約 35ha、地区内に農地を所有している農家は 39 戸で稲作が中心である。

(2) I 地区における研究者のかかわりとその評価

i) サロン大学及び里山づくり活動

I 地区は様々な取り組みと共に様々な研究者がかかわってきた地域でもある。ここでは I 地区における取り組みと共に、研究者がこの地域にかかわったことが、どのような意味を持つのか、ということについて考えてみたい。

1993 年より I 地区では地域内で幼稚園経営を行う N 氏を中心として「東広島サロン大学」を開校した。これは広島大学の統合移転を地域づくりにつなげ、生涯学習のまちづくりを市民レベルから実践する試みとして開始され、広島大学の研究者や多分野にわたる有識者・活動者などをゲストにしなが、定期的に勉強会をしていた。例えば美術の専門家を招いて、幼稚園児が作ったアート作品で地域の祭りをプロデュースしようという動きなどもおこっていた。

このような交流の中から、東広島の農業や里山への関心が生まれていった。そんな時、竹が増えすぎて手入れが難しくなった地元住民 N 氏の家の裏山を活動の場として使ってみてはどうかという話があり、そこで「農地・里山利用型市民農園」(里山と農地をセットにして広範囲の活動ができる場に再生する市民農園)を目指す里山づくり活動がはじまった。そして市民グループと

してその活動を継続し、広げていこうということも考えられていた。ただ、サロン大学への参加者と市民グループによる里山づくり活動への参加者が一致していたわけではなく、興味・関心のあり方がはっきりとわかれていた。

市民グループの活動には、ボランティア研究、都市計画、人文地理学、生態学、農学などを専門とする研究者がかかわっていたが、職業的研究者としてそこを事例に研究を行うというよりも、趣味・レクリエーション活動や情報収集場所として、又は授業の実習などで学生を連れてくる場所として活用していた。ただ、発言力が高い人材は多いものの、参加の頻度がまちまちなので、何か積極的な提案や行動を起こしていくには、安定性がないといえる。

ii) Iプロジェクトの発足

また一方で、I地区の地域住民（農家）の持つ課題もあった。I地区では将来的な農地維持管理のために集落営農に取り組むかどうかを検討されたが（2002年）、うまくいかず実現には至らなかったという経緯がある。その後その話題に関してはほとんど控したままであったが、この地域で活動している多様な人々も交えて意見交換を試みようということで、話し合いの場がもたれた。そこで話し合いを重ねていく中で、地域住民・農家、近隣住民、市民グループのメンバー、広島大学の研究者・学生等が集まって、I地区の農地保全やその活用について考え、具体的な活動を起こしていく試みとしてIプロジェクトが立ち上がった。その一環で地域の「おもしろさ」再発見ウォーク、「I地区でこんなことやってみよう提案・討論会」などのイベントが定期的に行われ、その都度プロジェクトやI地区の今後のことも含めて意見交換がなされている状況にある。

2006年にはプロジェクトの一環として、研究者らが企画・誘致したイベント「地域再生実践塾」がI地区をフィールドの一つとして行われた。それは全国各地より地域づくり、活性化に関心のある行政関係者や活動者が集まって、フィールドを見学しながら地域再生へのヒントを探す試みで、予期せぬ参加者のアイデアが実際の取り組みにつながったこともあり、よそから来た人がもたらす効果があらわれたといえる。ただ、地域における活動の担い手の増加にはつながらなかったため、その提案された取り組みは途中まで進ん

で止まっている状態となっている。

これらのIプロジェクトとのかかわりにおいて研究者は主に市民グループメンバーと連携しながら、他地域の取り組み事例に関する話題提供などを行っている。早速その話題が地域の策として採択されることはなかったが、他に明るい話題もない中で、問題意識を保ち、次のステップへのきっかけへとつなげるためには重要であったと思われる。最初の1、2回目の会合の時の地域住民の反応を思い返すと、これまでの農政事業の試みの失敗からくる無気力感や地域の将来に対する不安が強く感じられたように思う。その中で、研究者など外部のメンバーが、問題の共有、話題提供や議論の枠組みづくりを根気強く行い、イベントの仕掛けなどを行ってきたといえる。そこでの地域にとってのメリットをあげるとすれば、地域の人々同士の話からはおそらく出てこなかったであろうと思われる様な発想や価値観の導入がなされたということであろう。

しかしながら、それらの研究者としてのかかわりやはたらきかけが、地域やそこに住む人々にとって、どれだけ必要なことなのか、そしてきちんと伝わる形で提供できるのかについては吟味が必要ではないだろうか。しばしばみられたことが、お互いが「求めているものの違い」に気づかないまま、議論や取組みが進んでしまっているという場面であった。例えばIプロジェクトの話し合いの場合、地域住民・農家側は如何にしてI地区を農産物の産地にするかという方向性で農地の活用を意識していたのに対して、研究者側は景観保全、レクリエーションや環境教育的活用まで想定した提案などを行っていた。そうした時、議論を感覚レベルでも共有できる人は取組みの担い手になりやすいが、そうでない人にとっては自分の話ではなくなってしまう。常にそれぞれの立場の求めるものや想いを把握しながら、かかわることは必要であると感じる。

iii) 学生のかかわり

また最後に、I地区にかかわる学生も存在している。この地区にかかわる学生としては、市民グループ活動に参加する学生、教育や地域づくりをテーマに卒論や修論などを書いたり、サークル活動でかかわったりする学生、そ

して教員の授業で一度連れてこられる学生がいる。学生の中には、興味を持ち在学中に地域に深くかかわる学生もいるが、卒業とともにいなくなってしまうため、地域活動の担い手として期待するには、継続性が乏しいといえる。

学生がかかわる地域側のメリットとしては、地元の経緯や人々をあまり知らないからこそできる思い切った提案や行動があるだろう。それによって全く筋違いのことがなされる可能性も大きいですが、突飛な発想や取り組みが受け入れられ、流れにつながる場合もあるし、学生が地域の潤滑油的存在として機能する場合も多いといえる。

例えば市民グループの里山活動に参加していた T 君と H さんは、地域再生実践塾で参加者より出された提案を、「スタードームを生かした地域活性化の試み」として、助成金を獲得して実際に実施し、里山に増えすぎた竹を利用した地域連携構想を実行し始めていたが、二人の卒業と共に計画は止まってしまっている。H さんは竹林整備の経済効果をテーマに卒業論文を執筆した。

続けて卒論・修論およびサークル活動でかかわった学生として、例えば学部生の U 君は、子供を対象とした環境教育のサークルをつくり、I 地区も活動場所の一つであったが、卒業時にそのサークルを解散した。また U 君の紹介で I 地区に関わるようになった学部生、幼児教育専攻の I さんは卒業論文を書きながら、幼稚園児の自然体験を促す活動を行っていたが、その活動の一環としての呼びかけで、地元住民と市民グループを巻き込んだ、コメ作りの取り組みが試験的に始まった。しかし実際の農作業は農家の方のボランティアによって行われるため、農家の負担は増してしまうというジレンマもあったといえる。

また大学院生 K さんは、エコミュージアムの実現可能性を探るフィールドとして I 地区を取り上げ、住民へのアンケート調査などを行って修士論文を執筆した。そこでは、農地保全の意識には農家と近隣住民の間で隔たりがある中で、それらをつなぐ仕組みが必要であり、地域全体で取り組むための枠組みの重要性が明らかにされた。

(3) 自分が地域とかかわる中での課題及び研究につなげて

i) 自分が地域とかかわる中での課題

自分自身が研究対象地域として I 地区とかかわる中で、まずは問題解決的思考をもって対象にのぞんでいると思われる。しかし、絶対的に担い手（マンパワー）が足りないことから、案やモデルの提示から実行へとつながらないという限界を感じる。積極的な活動者ばかりにはなれないジレンマを感じると同時に、今ここで研究者としての役割とは一体何だろうかということについて自身に問いかけてながら研究活動をするようになっていくと思う。

中でも難しいと感じるのは、地域の未来像や目標をどこに設定すればよいかということである。地域の人々の想いを聞き、それを遂げる方向が果たして本当によいのかという自問自答も繰り返しながら、問題共有とともに第三者からの視点や論点、議論の場や枠組みを地域に提供することが、現在まずできることではないかと考える。

また、様々な研究者や人材が I 地区での活動を行っているため、自らの研究活動が地域に良くも悪くもそこまでの影響を及ぼしているとは考えていない。まず何故連携の仕組みづくりがうまくいかないのか、その要因を整理することからはじめたい。そしてその学びが、他の地域に接したときに、照らし合わせて考えるための一つの判断材料になることも重要なことだと考える。

ii) 地域とかかわる中での課題と研究とのつながり

フィールドとのかかわりの中から学んだことや得たものによって、研究にプラスにはたらく面としては、やはり地域の内情がみえている、ということであろう。感覚レベルで、今本当に地域の課題となっていることは何なのかということがみえていることは地域にかかわってきたことのメリットであり、分析や考察が大枠で妥当かどうかの判断がつきやすいであろう。

しかし、地域の課題にこたえることと、それを独立した研究として成り立たせることが、直接つながらないことのもどかしさや悩みも存在する。かわる地域が研究対象及び調査地として適合しているかどうか、不安になりながらも、それをなんとか活かして論文を書きたいという気持ちが強いといえる。

地域にかかわる様々な立場の人々の想いや行動を、これまでの地域経験によって得た視点を活かして追っていきたいと考えているが、特に研究課題設定について、模索中である。

4. 研究者が地域にかかわる上での課題

ここまで、研究者と地域社会とのかかわりについて、自らの研究事例をもとに考えてきた。地域研究において研究者が地域という対象に向き合う際の課題というものはたくさんあると思われるが、この事例から学んだことから導くとすれば何であろうか。

研究者が地域にかかわることを是とするならば、まず常にかかわり続けることができる存在であるかどうか前提となるように思われる。その上で、「地域」にどうかかわるか。研究者にとって「地域」とは研究対象、調査地のひとつであり、そこでは、試みの面白さ、地域のユニークさや、研究の典型例として位置づくかなどが重視されるであろう。一方で、地域住民にとって「地域」とは、例えばまさに現状をどうにかしなければならぬような場所である。

その両者の「地域」認識の違いも踏まえつつ、地域の方向づけに試行錯誤しながらも、如何に第三者からの視点を地域に提供しうるかが課題の一つとなるのではないだろうか。そして、地域とのかかわりの中から学び、その視点を他の地域をみる際に活かしていくことも大事なことであろう。

(mi2take@hiroshima-u.ac.jp)